

平成 19 年度畜産大賞 地域畜産振興部門最優秀賞受賞事例の概要

最優秀賞受賞事例の名称・代表者名

「山間地域における肉用牛増頭の取り組み」

—山間地という悪条件を克服し、地域ぐるみの力が生んだ「6,500 頭」—

高千穂地区農業協同組合 畜産部（代表：佐藤 高則）

現在、山間の多くの地域で、過疎化、高齢化が著しく進んでいるという深刻な実態がある。本事例は、山間地域における上記の諸課題を改善・解消するために、肉用牛生産振興を柱として具体的な数値目標を取り入れており、農協とそれを核にした、協議会等の組織的対応が行われている。

1つは、目標設定の適切さである。それは、何よりも農村地域の持続性、それに貢献する肉用牛産業の持続性の確保ということであり、これらの基本的目標が多くの関係機関、非農業者も含めた多岐にわたる関係者の間で共有されている。

2つは、取り組み内容の適切さである。最も重要な点は、その取り組みの“体系化”である。しかもその体系化が、当農協を中核にした関係機関の間の適切な連携、その連携を確保するための仕組みづくりに体现されている点である。

3つは、小規模農家、高齢農家の営農継続と合理化に向けた極めて現実的な支援体制である。不妊牛の種つけ、病気療養中の生産者からの一時預託、ふん尿処理、完熟堆肥の供給、草地提供などに代表される、多様な領域にわたる支援活動を展開する「上野すけっと共生牧場」は、山間地域における支援体制の方向性を示している。

また、これらの取り組みに加えて注目される点は、当地域の肉用牛生産の持続性の確保、山間地域の将来をも睨んだ、人的な連携などに代表される新しい体制と取り組みへの挑戦が行われていることである。

しかも、条件不利地域の生産を補うべく、隣県からの飼料の確保と同時に、耕地面積が極端に少ないという当地域において、自給飼料の確保が困難、購入飼料に依存することによる経済的負担の軽減ということを目指して、積極的な地域資源の有効活用という観点から、放牧の可能性を試行している。

さらに、西臼杵型放牧ネットワーク会を立ち上げ、「放牧ネットワーク会報」誌の発行、新規放牧実施農家への支援、既存の放牧実施農家への支援、研修会開催による地域への普及活動を実施している。

このように、地域の人的資源を最大限に活用するとともに、条件不利地域の生産基盤を補う活動、また、地域の物的資源の活用、生産物の付加価値の地元への還元、さらに新しい地域産業の活性化へ結びつけていることなど、本事例は、本県はもとより、わが国の多くの山間地域の農業の持続性の確保と活性化のあるべき方向を示しており、その社会的貢献と意義が極めて大である。